

目の腹部 MRI で血性腹水の存在が確認されたが、腫瘍破裂による出血性ショックとなり御永眠された。家族の承諾のもと病理解剖を行った。肝表面は凹凸不整で、肝両葉に暗紫色で多発する大小不同の出血性結節が散在した。組織学的に大小の血管腔形成を認め、内腔面に存在する腫瘍細胞は紡錘形ないし類円形で部分的に充実性増殖を伴っていた。腫瘍細胞に多形性を認めること、核分裂像が散見されること、免疫組織学的に腫瘍細胞が血管内皮の形質を有することより、肝血管肉腫と診断した。

【結果】

平均年齢が 61.5 歳、性比は 20 : 11 で男性に多く、原因は 30 例が不明であった。診断根拠は 14 例が病理解剖であった。予後は 6.2 ケ月と不良であった。

【結論】

肝血管肉腫の 1 例を経験した。今後症例の蓄積により治療法の確立が希望される。

24 当院における PBC 症例の検討

瀧本 光弘・坂内 均・渡辺 俊明*

済生会三条病院消化器科
わたなべ医院*

当院の PBC 患者を集計し検討した。1992 年から 2005 年までの期間で診断された 37 例を対象とした。男 5 例、女 32 例、平均年齢 60.6 歳。初診時診断では無症候性 30 例、症候性 7 例、観察期間は平均 61.4 ケ月であった。自覚症状は掻痒感、黄疸、腹水、浮腫、脳症等を認めた。合併症は自己免疫性肝炎 3 例、C 型肝炎 3 例等であった。

腹腔鏡下肝生検施行 12 例、赤色パッチを 7 例に認めた。組織所見で CNSDC を 7 例で認め、Scheuer の病期分類で Stage I が 7 例、stage III が 2 例であった。

UDCA が第一選択薬で、併用薬はステロイド 3 例、利尿剤 4 例、ベザフィブレート 7 例。死亡例が 3 例あったが、死因が PBC は 1 例で、2 例は他病死だった。

治療効果を検討した。UDCA は効果があるもの

の、その効果は完全でないと考えた。ベザフィブレート併用例では、ALP は全例で正常化し、効果を認めた。

胆管病変の進行度が軽度な例ではベザフィブレートは有効性があると考えられ、UDCA に抵抗性の PBC 患者に対し、今後ベザフィブレートの併用を考慮する必要がある。

25 UDCA が著効した高齢者男性にみられた自己免疫性肝炎の 1 例

岩崎 友洋・佐藤 明人・山田 聡志

坪井 康紀・三浦 努・柳 雅彦

高橋 達

長岡赤十字病院消化器科

UDCA が著効した高齢者男性にみられた自己免疫性肝炎の 1 例を経験した。

症例は 73 歳、男性。2005 年 7 月 10 日頃から全身倦怠感が出現し、7 月 25 日、近医受診したところ黄疸を指摘。血液データで肝障害・黄疸が認められたため、7 月 26 日当科に紹介入院となった。TBil 5.5 と直接型優位の黄疸を認め、AST 751、ALT 1078 と上昇し、胆道系酵素も上昇していた。血糖が 229 と高値であった。IgG は 1784 と増加しており、抗核抗体も 1280 倍と高力価陽性であった。肝炎ウイルスマーカーは陰性で、抗平滑筋抗体、抗ミトコンドリア抗体、M2 抗体は陰性。エコーガイド下肝生検を施行したところ、F3A3 であり、形質細胞の浸潤を認め、自己免疫性肝炎と診断した。トランスアミナーゼは 100 台後半にまで改善したが、その後下げ止まり状態であった。73 歳と高齢であり、随時血糖が高値であったことからステロイドは選択せず UDCA を開始したところトランスアミナーゼは正常化した。UDCA には胆汁分泌作用、肝細胞膜保護作用のほかに、免疫調節作用を有する。免疫調節作用はグルココルチコイド受容体を介して行われる。ステロイドの有する免疫抑制作用をより強く発現することで、副作用を起こすことなく免疫抑制作用を発揮すると考えられている。自己免疫性肝炎に対し UDCA 単独投与は、高齢者などステロイドの副作